

京都市立工業高校が発展するための具体的展望と将来のあり方を検討

「京都市立工業高校将来構想委員会」第2回会議の開催について

「ものづくり都市・京都」、さらには「技術立国・日本」を支える人材を数多く輩出してきた京都市立洛陽工業高校及び伏見工業高校が生徒や保護者、産業界等のニーズに応え、より魅力ある学校として発展し続けることを目指し、平成22年7月に提出された「京都市立工業高校のあり方に関する検討プロジェクト」の「まとめ」で示された方向性をより具体化する方策や学校の規模、施設整備等について、幅広い観点での審議を進める『京都市立工業高校将来構想委員会』の第2回会議を下記のとおり開催します。

記

1 日 時 平成23年11月10日（木）午後1時30分から（2時間程度）

2 場 所 京都市立洛陽工業高等学校 南実習棟3階ミレニアムホール

3 内 容 ○ 「工業高校において育てるべき力」に関する協議

- ・第1回会議*における審議内容の確認（前回会議の委員要求資料に関する説明を含む。）
- ・「京都市立工業高校のあり方に関する検討プロジェクトのまとめ」（平成22年7月）の概要説明
- ・質疑応答，意見交換

○ 施設見学

※8月25日に開催された第1回会議では、市立工業高校の概要・市立工業高校改革の状況に関する事務局からの説明、質疑応答、意見交換が行われました。

第1回会議の議事録については以下をご参照ください。

<http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000086059.html>

4 傍 聴

傍聴席を10席程度設置（報道関係者席は別途設置）。傍聴希望者は、会議の開始30分前から5分前までの間に、会場受付へ来場。多数の場合は抽選を行います。

<参考>

- 1 「京都市立工業高校将来構想委員会」の審議における検討の視点
 - (1) 「京都市立工業高校のあり方に関する検討プロジェクト」における「まとめ」で示された方向性をより具体化する方策
 - (2) 上記(1)の方策や生徒・保護者・産業界等のニーズを見据えた今後の学校規模と施設整備のあり方

2 構成メンバー

(敬省略 五十音順に記載)

氏名	役職等
池垣 伊三郎	京都市立伏見工業高等学校同窓会 会計
尾河 清二	洛陽京工会 副会頭
奥 美里	京都市総合企画局 市民協働政策推進室 担当部長
高橋 智隆	ロボットクリエイター (株) ロボ・ガレージ代表取締役社長
高倉 章雄	京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科 教授
竹川 貴博	市民公募委員
中山 誠	市民公募委員
名高 新悟	京都機械金属中小企業青年連絡会 代表幹事
廣瀬 忠愛	京都市立中学校長会 副会長
福本 早苗	武庫川女子大学 生活環境学部 教授
松重 和美	京都大学大学院 工学研究科 教授
水田 真紀	立命館大学理工学部 助教
向井仲 和美	京都経営者協会 専務理事

※専門委員

(敬省略 五十音順に記載)

氏名	役職等
生田 義久	京都市教育委員会事務局 教育政策監
恩田 徹	京都市立洛陽工業高等学校 校長
道越 隆夫	京都市立伏見工業高等学校 校長

3 今後の予定

来年秋頃を目途に委員会としての「最終まとめ」を、パブリックコメントの手続きを経て、教育長に提出。

4 平成22年7月「京都市立工業高校のあり方に関する検討プロジェクト」の「まとめ」の概要

<市立工業高校に求められる役割>

1 産業界が工業高校に求める人材育成のあり方

豊かな人間教育の実践、勤労観・職業観の醸成、将来の夢に向かってチャレンジするための将来設計・計画実行能力、自己の生き方を主体的に選択する能力、環境変化に機敏かつ柔軟に対応できる課題解決能力、社会貢献への意識啓発、産学・地域とのパートナーシップに基づく人材育成

2 工業高校における大学進学希望者のニーズに応える教育の充実

- ・大学や研究機関、企業での研究開発、経営分野等へ進む道も切り拓ける工業高校づくりも必要。
- ・地域・産学連携など「外部の教育力」をさらに活用していくべき。

3 小・中学生にとって魅力ある工業高校の在り方

中学生は「モノづくりが好き」という理由だけでなく、部活動、「就職に有利」など様々な理由で工業高校を選択している現状もある。そうした生徒も「工業好き」に育てる魅力ある教育活動が必要。

<市立工業高校の更なる発展に向けて>

1 「ものづくり」への興味・関心

専門知識・技術が実際どのように社会で活用されるのかを理解するためには、産学・地域連携の取組や各専攻コースの力を融合して、みんなで目標を共有してロボット等一つのものを作り上げるなどの取組が大変有効である。

2 両工業高校の連携

工業2校として就職・進学とも柔軟に対応できることが理想であるが、今次改革の成果について両校が互いに参考にすべき点は多く、両校がそれらを尊重していくことで工業高校の更なる発展が可能であると考えている。

3 教員の資質向上

「教育は人なり」と言われるように、生徒たちをひきつける教員自身の魅力が不可欠。教員自身も企業や大学、自治体、地域との連携を通じて刺激を受けながら、資質や力量の向上に努めることが必要。